

日本英文学会 中国四国支部 第73回大会 プログラム・梗概

会期：2021年10月23日（土）

会場：オンライン開催（Zoom 使用）

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東 6-13-1
安田女子大学文学部英語英米文学科 島克也研究室内
TEL 080-4887-6608

第73回支部大会は、Zoomを用いてオンラインで10月23日(土)のみ開催いたします。
第1室から第5室までの入室方法およびアドレスは、開催日までにEメールにてご連絡いたします。詳細は日本英文学会中国四国支部のホームページをご覧ください。

開会式 (10:00-10:15 第1室)

開会の辞 (司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長 島 克也
日本英文学会中国四国支部支部長 今 林 修

研究発表 (10:30-12:50)

第1発表 10:30-11:10 第2発表 11:20-12:00 第3発表 12:10-12:50

第1室

- (司会) 尾道市立大学教授 平 山 直 樹
1. 根源的モダリティ may の考察—可能世界意味論と語用論の観点から—
広島経済大学講師 合 田 優 子
 2. 『大いなる遺産』における発話・思考・書法の使用に関する文体論的考察
広島大学教授 今 林 修

第2室

- (司会) 広島大学教授 大 地 真 介
1. Zora Neale Hurston の初期劇に窺える独自性 —Color Struck を中心に—
広島修道大学外国語契約教員 光 森 幸 子
(司会) 九州工業大学教授 大 野 瀬 津 子
 2. Readers' Columns, Author and Fan Exchanges in the American Pulps of the 1930s
学習院女子大学英語コミュニケーション学科教授 Dierk Günther

第3室

- (司会) 広島大学教授 吉 中 孝 志
1. 『王妃たちの仮面劇』におけるアン王妃の文化表象再考
—初期ステュアート朝の派閥政治と対外政策の視点から—
関西学院大学大学院文学研究科文学言語学専攻博士課程後期課程 西 田 侑 記
 2. 'Strete' から 'Flinty Pavement' へ：
道路史から解釈する『二人の貴公子』と都市に職を求める失業兵士
岡山理科大学講師 西 野 友 一 朗
 3. 王室の秘密を握る家臣たち
—『冬物語』における政治的演出とジェイムズ1世時代の外交政策の関わりについて—
鹿児島大学准教授 丹 羽 佐 紀

第4室

(司会) 広島大学教授 小野 章

1. The effect of gender on Japanese EFL learners' use of hedges in a LINE discussion forum
広島修道大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程 Stachus Peter Tu
2. 英語教育における「異文化理解」の語られ方を問い直す
福岡県立田川高等学校教諭 中原 瑞 公

第5室

(司会) 広島大学准教授 榎田 一路

1. Using the four resources model and student created visual scaffolds to support EFL literacy development
徳島大学講師 Meagan Renee Kaiser
2. 「推察」と「表情」の脱意味論と世界像 — 「疑問文のシャドーリーゾニング効果」と
英語フィールドに於ける「文字範疇を超えた意味形成と意思疎通」への展望—
静岡大学教授 久部 和 彦

シンポジウム (13:00-16:00 第1室)

題目：話法の歴史的発達

チャオサーの話法における「安定」と「不安定」

(講師) 広島大学名誉教授 中尾 佳 行

初期近代英語における話法：デフォーの一人称自伝小説を事例に

(講師) 鳥取大学准教授 重松 恵 梨

ディケンズにおける話法：直接話法を中心に

(司会・講師) 近畿大学准教授 西尾 美由紀

現代小説における直接話法の分類

(講師) 専修大学教授 池尾 玲 子

特別講演 (16:10-17:10 第1室)

(司会) 広島大学教授 今 林 修

演題： 今、なぜ異文化コミュニケーション学なのか

講師： 立教大学名誉教授 鳥飼 玖美子

総会・閉会式 (17:20-18:00 第1室)

(司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長 島 克 也

総 会

閉会の辞 日本英文学会中国四国支部副支部長 水 野 和 穂

— 研 究 発 表 —

根源的モダリティ may の考察—可能世界意味論と語用論の観点から—

広島経済大学講師 ごう だ ゆう こ
合 田 優 子

Portner (2005: 158)では、may は可能性(possibility) に該当するという。Kratzer (1981, 1991, 2012)の可能世界意味論で考えると、may の様相力(modal force)は可能性に該当すると考えられる。

中野 (2014: 40-41)によると、may は許可を表し、can と比較した場合は、改まったニュアンスがあるという。また、畠山 (2012: 2-3)では、must に比べて may は勧誘的な状況において用いると不適切であるという。

可能世界意味論の枠組みで考えると、may は指定する可能世界の数が少ない、つまり、義務の力が弱いと想定できるにも関わらず、聞き手に失礼な印象を与えるのである。may の考察は、意味論からでは行為の許可を表し、語用論からでは失礼な印象を与える場合がある、となる。本発表では、両方の領域から may の考察を行う。

Searle (1969, 1979)の言語行為の観点で考えると、「You may～」の表現は、⑤の宣言型(declarations)に該当すると予測する。発語内の力(illocutionary force)と命題内容を区別できないと考えるからである。(cf. Searle (1979: 17))

最終的に、様相基盤(modal base)と順序源(ordering source)についても検討し、意味論と語用論の観点から may の特徴付けを行う。

『大いなる遺産』における発話・思考・書法の使用に関する文体論的考察

広島大学教授 いま はやし おさむ
今 林 修

ディケンズの作品における Free Indirect Speech/Thought の研究は意外と早く(Glauser 1948, Yamamoto 2003 [1950], Quirk 1951, Stone 1959)、また、Speech (発話)と Thought (思考)に関しては、Brook (1970)が扱い、Page (1988 [1973])が詳述している。Direct Speech の伝達部に頻出する“suspended quotation”を指摘した Lambert (1981)や speech と idiolect との関連を扱った Golding (1985)は独創的な研究であり、さらに、Mahlberg (2012)は Corpus Stylistics の立場から Lambert (1981)の研究を深化させた。オースティンと比べると、ディケンズは作品の中で手紙をあまり使用しないからか、彼の作品における Writing (書法)に関する研究を発表者は知らない。

本発表では、上述の先行研究に加えて、Stylistics や Narratology における語法研究(Leech and Short 2007 [1981], Fludernik 1993, Semino and Short 2004 等)を適宜援用しながら、『大いなる遺産』(1860-61)における発話・思考・書法の使用に関して、それらの文体的特徴を明らかにしたい。特に書法については時間を割きたいと考えている。

Zora Neale Hurston の初期劇に窺える独自性 —Color Struck を中心に—

広島修道大学外国語契約教員 みつ もり さち こ
光 森 幸 子

Hurston が小説家だけでなく劇作家でもあったことはあまり知られていない。また、たとえ彼女の劇が取り上げられたとしても、小説からの逸脱と見なされたり、小説理解のために補助的に扱われたりするなど、その価値が独立して考察されることは少ない。しかし、Hurston は 1925 年に、雑誌 *Opportunity* の文学コンテストに劇と短編小説を 2 作品ずつ応募し、短編小説 “Spunk” で二位を獲得しただけでなく、劇 *Color Struck* でも同位に輝き、さらに別の劇 *Spears* でも審査員の高い評価を得て、ハーレムの演劇界で名を知られるようになった。先行研究はまだ少ないものの、ハーレムルネサンス期の演劇を広く研究する David Krasner は、2002 年に *Color Struck* を詳細に論じている。

本発表では、Krasner の論考を引きつつ、作品の背景である 1900 年代初頭のグレート・マイグレーションを念頭に、北部に移住する黒人男性の価値観に対する Hurston の危惧や、その一方で南部に取り残される黒人女性に対する共感を読み解き、Hurston が作品の題名に込めた黒人女性の希望を考察したい。そのうえで、W. E. B. Du Bois のプロパガンダ的手法や Alain Locke の “New Negro” の促進とは一線を画する独自の視点を明らかにする。

Readers' Columns, Author and Fan Exchanges in the American Pulp of the 1930s

学習院女子大学英語コミュニケーション学科教授

Dierk Günther

Pulp fiction magazines were one of the most popular entertainment forms of the early 20th century United States. The pulps were the victory of the working class. They took away literature from a cultural elite and turned it into entertainment enjoyed by a wider group. Moreover, the pulps revolutionized the traditional way literature was created and consumed.

One of the new features that came along with the pulps was that due to the commercial aspect of these magazines the readers became involved in what would be published in the various pulp magazines. The big innovation which started this process was the establishing of readers' columns in 1912. This paper will look at the implications of this novelty and the dynamics these readers' columns created. In the readers' columns, readers gave feedback on the stories published in previous issues. In doing so, they not only exerted strong influence on the content of their favorite magazines. This feedback also became a new kind of literary criticism. Moreover, in the readers' columns various new forms of discourses emerged, with readers communicating directly with fellow readers, editors, authors and vice versa. Many of the contacts established in the readers' columns led to further activities outside of these columns. Authors who had met in readers' columns kept in contact and formed independent groups, such as the Lovecraft Circle, a gathering of pulp fiction writers with H. P. Lovecraft at their center.

Then there were also the exchanges among readers: Especially the readers of fantastic fiction led at times heated discussions attempting to define the various subgenres of a genre that was then only referred to as weird fiction. Finally, when the pulp magazines began to publish their readers' full addresses in these columns, readers had the opportunity to get in contact with each other outside of the pulp magazines. This eventually became the origin of organized fandom.

『王妃たちの仮面劇』におけるアン王妃の文化表象再考 —初期ステュアート朝の派閥政治と対外政策の視点から—

関西学院大学大学院文学研究科文学言語学専攻博士課程後期課程 にし だ ゆう き
西 田 侑 記

ステュアート朝宮廷文化の観点から仮面劇を読み解こうとする場合、興味深い作品の一つとしてベン・ジョンソンの『王妃たちの仮面劇』が挙げられる。ジェームズ一世の妃アン・オブ・デンマークが主演をつとめた同作品には、アマゾネスや夫殺しをはじめとして、父権主義の規範から逸脱した歴史上の女王たちがつぎつぎと登場する。批評家たちはここに国王夫妻の文化摩擦を見出し、劇の寓話から王妃の反体制的な自己表象を読みとろうと試みてきた。しかし、このアプローチは作品の政治的意味を王族内のジェンダーポリティクスに求める点でしばしば巨視的な視点を欠いている印象は否めなかった。諸外国の大使や各派閥に属する宮廷人を招き、王権の祝祭として催された『王妃たちの仮面劇』は、外交戦略や派閥闘争を含むより広義の政治的文脈の中で吟味される必要があるのではないかと。このような前提に基づくと、作品の手稿が国王の嫡男ヘンリー王子に献呈された意義についても再考の余地があるように思われる。この仮面劇が上演された1609年2月、若干14歳のヘンリーはすでに軍事派プロテスタントの庇護者として注目的になりつつあった。本発表では、初期ジェームズ朝における派閥形成や国王の対外政策について概観した上で、アンがそれらとどのようにかかわっていたのかを検証し、『王妃たちの仮面劇』における王妃表象に政治文化の視座から新たな光を当ててみたい。

‘Strete’ から ‘Flinty Pavement’ へ： 道路史から解釈する『二人の貴公子』と都市に職を求める失業兵士

岡山理科大学講師 にし の ゆういちろう
西 野 友 一 朗

フレッチャーとシェイクスピアによる『二人の貴公子』(*The Two Noble Kinsmen*, 1634)の5幕4場で、パラモンに勝利したアーサイトは馬に乗って「火打石の舗道」(‘flinty pavement’, 5.4.59)を凱旋する。作品の原典となった『騎士の物語』には‘thurghfare’ (KT, 2847)や‘the maister strete’ (KT, 2902)という表現はあるものの、「火打石の舗道」の表現はなく、なぜ「火打石の舗道」と付け加えられたのかは未だ議論されていない。ヨーロッパの道路史では、火打石の舗道はイギリスでは16世紀以降に登場し、舗装工事は人口が集中する都市で優先的に行われた。

本発表では、『二人の貴公子』で描かれる道路に着目し、「火打石の舗道」はジェームズ朝のロンドンの通りを表していることを指摘する。まず、道路史の観点から火打石の舗道の成り立ちを説明し、舗装工事が進んだ背景には都市部への人口集中があったことを指摘する。次に、舗装工事の需要を高めた人口集中の要因の一つに失業兵士の増加があったことを指摘し、作中でパラモンとアーサイトは失業兵士として描かれており、なおかつ初期近代ロンドンの道路と関連付けられていることを指摘する。そして、失業兵士として描かれるアーサイトが「火打石の舗道」を凱旋する様子は、失業兵士の滑稽さを表していると論じる。

王室の秘密を握る家臣たち

—『冬物語』における政治的演出とジェームズ1世時代の外交政策の関わりについて—

鹿児島大学准教授 ^に ^わ ^さ ^き
丹 羽 佐 紀

シェイクスピアの『冬物語』において、王妃ハーマイオニーに仕えるポーリーナは、王のリオンティーズにハーマイオニーが亡くなったことを告げてから16年もの間、王室でどのような真実が伏せられていたかを握るただ一人の人物として描かれる。そして劇の最後の場面で、いつ誰にどのような方法でその真実を告げるのか、それら全てを演出するのも彼女である。また同じように、彼女の夫アンティゴナスは、3幕2場で熊に襲われ命を落としはするが、その直前に水夫を船へ返し、一人で赤子のパーディタをボヘミアの海岸に置く。すなわち彼は、父王のリオンティーズに捨てられた王女パーディタが、追放のあげくどこへ捨て置かれたのか、真実を知るただ一人の家臣となる。ポーリーナとアンティゴナスは共に、シチリアの王に仕える者として、王が知らない秘密を握る重要な登場人物なのである。

上演当時、ジェームズ1世の政権下で諸々の命令を直接下すのは王自身であったが、実際には家臣たちの様々な思惑により、王へ進言する情報の取捨選択がなされ、政策決定に少なからず影響を与えたと言われる。本発表では、それぞれ王室の秘密を握るポーリーナとアンティゴナスが、シチリアとボヘミア両国の和解と友好に大きな影響を与え、結果として効果的な政治演出を果たしていることを明らかにし、それがジェームズ1世政権下における家臣たちの役割をどのように反映させているのか論じる。

The effect of gender on Japanese EFL learners' use of hedges in a LINE discussion forum

広島修道大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程 Stachus Peter Tu

The majority of online communication among Japanese university students takes place through the LINE smartphone application, yet there are virtually no studies that employ LINE as a tool for investigating Japanese EFL learners' online linguistic behavior. To fill this gap, the purpose of the study is to investigate how male and female Japanese university students differ in their use of hedges in online discussion by employing a LINE discussion forum. In this online discussion forum, Japanese EFL learners from three separate English courses at two middle-ranking Japanese universities create controversial topics such as "Smoking should be banned on campus." in class and proceed to discuss the topics with their classmates. We then analyze the use of hedges in messages that involve a female responding to a female, a female responding to a male, a male responding to a female, and a male responding to a male. Findings indicate that female participants have a higher hedge-to-word ratio than male participants when responding to both females and males. The study concludes that females may employ hedges more frequently than males in online discussions.

英語教育における「異文化理解」の語られ方を問い直す

福岡県立田川高等学校教諭 なか はら みず き
中 原 瑞 公

本発表の目的は、エドワード・サイードによるオリエンタリズムに関する批評を援用しながら、英語教育における「異文化理解」の前提を「批判的」に問い直すことである。本発表では、「自文化／異文化」という二項対立を自明視することから生じている3つの前提（「文化」は実体である、「文化」の単位は集団である、「異文化理解」を通して「自文化理解」が促進される）の問題点を論じる。本発表を通して、「自文化／異文化」という二項対立を所与のものとする「異文化理解」は、相互理解を促進するものではなく、むしろ阻害するものであることを示す。

結論部では、「自文化／異文化」という二項対立にもとづく「異文化理解」の限界を乗り越えるために必要な視点として、「個の文化」および「第三の文化」という考え方を紹介する。加えて、「異文化理解」を美しいことばで定義されるだけの調和的なものにとどめず、コンフリクトに満ちたものとして捉え直すため、「批判的研究」を展開することの重要性を論じる。

Using the four resources model and student created visual scaffolds to support EFL literacy development

徳島大学講師 Meagan Renee Kaiser

The four resources model developed by Freebody and Luke has helped to broaden educational perspectives in the way we understand literacy. The roles of (1) reader as code-breaker, (2) text participant, (3) text user, and (4) text analyst have helped education researchers reconceptualize what it means to be a proficient reader in the modern world. Studies in education, psychology, and language acquisition confirm that visual scaffolding of text and auditory input has positive impacts on learning.

I would like to propose an approach to EFL literacy education based on the four resources model and student created visual scaffolding grounded in multi-year classroom research conducted with first and second year university students in Japan.

「推察」と「表情」の脱意味論と世界像 — 「疑問文のシャドーリーゾニング効果」と英語フィールドに於ける「文字範疇を超えた意味形成と意思疎通」への展望—

静岡大学教授 ひさ べ かず ひこ
久 部 和 彦

疑問形が含有するシャドーリーゾニングという「影の推論・推察力」のゾーンや効力を理解させ、その操作力の付与に関わる言語指導力開発を考察する。同時に、「サイン・ランゲージ（音声言語に代わり手や指・腕の動作、表情による感情表現力）」という「整理分解が困難な意味領域」へも目を向けながら言語運用力の開発方法を展望する。元来、曖昧性をイメージしがちな「表情」や「サイン」による発信も、ICT 全盛の社会インフラの中では、ラインスタンプの活発な交換など、意思疎通の日常的な意味ツールとして広がりを見せている。文字言語交流が有する「合理的な整理力」への懐疑や、「問いかけ」への好奇心などと相まって、文字の比重が重い意味交換体制への疑問や閉塞感が、今やある種の「パラダイムシフト」として顕在化しつつある。写真や絵図のもつ「意味論的なボリュームの再配分」に踏み出しているといってもよい。しかしながら、絵図や表情は、推察や推論が拡張し、狭めてきた記号と意味の「突合せ」が外れる。それでよいのであろうか？ 答えは「よい」になる。何故か。良き言語理解力の育成には、「推察力」の付与が不可欠であり、推察力は理解の深層構造や世界像の「編成力」を生み出す。「絵図や表情」と「推察力」の2つは重点化のセットなのである。影の推理力は認識操作力の向上と世界像の深堀りに繋がる。文字と対象の意味リンクに依存度が高い英語教育の構造改革と脱構築が急を要する。

— シンポジウム —

話法の歴史的発達

英語文学作品における話法は 18 世紀初頭の小説の勃興以降急速に発達してきた。話法の形式が多様化し、小説では登場人物の発話や思考を表出する際に自由間接話法が使用されるようになった。さらに、20 世紀の意識の流れの小説では、さまざまな話法のカテゴリーが複雑に絡み合って虚構の意識を創り出している。そのため、英語における話法の研究は後期近代英語以降に焦点が当てられることが多かった。本シンポジウムでは、「話法の歴史的発達」をテーマに、中英語まで遡り、初期近代英語、後期近代英語、現代英語の各時代の文学テキストにおける話法に着目し、話法の歴史的発達を概観してみたい。話法は Leech and Short (1981) が話法のモデルを提示して以降、その研究は複合的に考察されるようになった。単に被伝達部(reported clause)の表現特性だけではなく、それを導入する punctuation の有り様、伝達部(reporting clause)の構造 (例えば 伝達部に付随して発話の様態などを表し劇的効果を高める副詞的付加詞 (cf. Page1988[1973]))、話法の連続体におけるカテゴリー間のシフト、口語性などが議論されてきた。各時代を 4 名の講師が担当し、伝達部や punctuation、話法の分化とその選択、口語性の問題にも触れながら、話法を通時的観点から考察する際の課題や展望についても議論したい。

チョーサーの話法における「安定」と「不安定」

(講師) 広島大学名誉教授 なか お よし ゆき
中 尾 佳 行

トロイラスは捕虜交換によるクリセイデのギリシャ行きを、宿命であるのか、自由意志で阻止できるのか、葛藤する。その内的独白の冒頭3行を示す。He seyde he nas but lom, weylaway! / “For al that comth, comth by necessitee: / Thus to ben lom, it is my destinee. Tr 4.957-59 (テキストは Benson 1987 に拠る。) He seyde は間接話法のスピーチ (厳密には思考) を導き、と思えば間投詞 “weylaway”、直後直接話法が続く。間接話法の1行に対し直接話法は4.1078 まで121行続く。この二つの話法は確かに安定している。一つの伝達動詞で突然の話法シフト、間投詞は間接話法の一部か、独立した話法か、更に人物の嘆きか、語り手の聴衆へのメタ談話か。チョーサーの話法は発達途上にはあるが、近代初期の劇を後押し、近代後期では書き言葉を通して精緻化、モダニストにおいてその体系は意識、同時に口語化して崩され、ある意味「中世」の柔軟性 (plasticity) に舞い戻された。

Leech and Short (1981)は近代小説をモデルに話法を構造化した。これをそのまま orality と literacy の連続体の中世作品、しかも韻文には応用できない (写本には引用符無し)。チョーサーの話法は既に Fludemik (1993, 1996)が口語介入や自由間接話法の端緒を、Moore (2011)がスピーチと語り部の柔軟な移行を分析するが、物語の話法タイプの頻度、スピーチと思考の峻別等、今尚再考を要する。本発表ではチョーサーの話法の「安定」、「萌芽性」(自由間接話法)、そしていずれとも言い難い中間形態、「不安定」を検討する。韻律構造を通した話法意義付け (背景化・前景化) についても考慮する。

初期近代英語における話法：デフォーの一人称自伝小説を事例に

(講師) 鳥取大学准教授 しげ まつ え り
重 松 恵 梨

英国小説における話法研究を通時的観点から見た場合、19世紀初期以前の作品については考察対象から外されることが多い (例外として、Bray (2003)は18世紀の書簡体小説における意識描写を研究し、Fludemik (1993)は19世紀以前の作品の話法を通時的に扱っている)。主な理由として、以下の2点があげられる (cf. Bray 2003, Palmer 2004)。(1) 従来の話法研究において中心的に議論されてきた自由間接話法が、小説勃興期にはまだ使用されていなかったと考えられているため、(2) 一般的に、小説勃興期の作家が用いた一人称小説では、自由間接話法という形式が起らないと誤解される傾向にあるため。

本発表の目的は、ダニエル・デフォーの自伝小説を事例に、小説勃興期の一人称小説においても自由間接話法を含む多様な話法形式が使用されていることを例証することである。本発表では、デフォーが使用する話法の種類を Leech and Short (1981)の話法モデルと照らし合わせながら示すために、一人称小説に見られる二つの表現主体 (語り手としての「私」と登場人物としての「私」) の関係を明確にした上で (cf. Cohn 1978, Stanzel 1984)、両者の心理的距離が様々な話法の形式を産み出していくプロセスにどのような影響を及ぼしているのかを考察する。心理的距離を表す言語指標としては、人称・時制・ダイクシス表現・伝達動詞・書記法等に着目する。

ディケンズにおける話法：直接話法を中心に

(司会・講師) 近畿大学准教授 ^{にし お み ゆ き}
西 尾 美由紀

18世紀初頭の小説の勃興以降、発話や思考、語りの提示の手法が多様になってきた。特にジェーン・オースティンは登場人物の発話や思考を描出する際に自由間接話法を巧みに用いている。19世紀になると、ディケンズのみならず、他の同時代作家たちも、語りの中に登場人物の声の濃淡を変化させながら織り交ぜていく。Leech and Short (1981)の話法のモデルを、Page (1988[1973])は語りに埋め込まれた登場人物の声の度合いに応じて詳細に分類しようと試みている。ディケンズの作品では、登場人物同士の会話は直接話法で生き生きと描かれることが多く、劇作家に憧れを抱いていたため、he saidのような伝達部に、演劇のト書きのような要素である副詞的付加詞を加え、読者が、あたかも登場人物が目の前で話しているかのように発話が起る瞬間の様子を描いている。本発表では、ディケンズの作品を中心に、直接話法と伝達部に焦点を当て、作家が語りの中に様々な話法の形式を駆使していることを検証したい。

現代小説における直接話法の分類

(講師) 専修大学教授 ^{いけ お れい こ}
池 尾 玲 子

語り手がストーリー展開上、比較的重要な役割を担った近代までの小説に対して、20世紀以降の小説では、登場人物の会話・思考がストーリー展開の要となっている。Semino and Short (2004)の20世紀小説のデータによると、直接話法の二つのカテゴリー、Direct Speech (DS)とFree Direct Speech (FDS)を合わせた頻度は全話法のカテゴリーの中で最大であり、登場人物の「セリフ」を抜きに現代小説を語ることは難しいことがわかる。

直接話法の現代小説における重要性が認識される一方、Short (1988)と Semino and Short (2004)においては、Leech and Short (1981)に基づくDSとFDSの区別への疑義が提起されている。FDSはDSの単なる小区分であり、独立したカテゴリーとは言えない、という議論である。この根底には Semino and Short (2004)が、小説のみならず、新聞記事や伝記といったノンフィクションのジャンルまで話法のカテゴリーを応用し、元の発話と話法の関係性を重視したことがあると考えられる。

小説における話法は、少数の例外を除いて、ストーリーの中でその瞬間に発話が起きているように見せかける手段であり、元の発話への忠実性はあまり大きな意味を持たない。21世紀の現在時制で書かれた小説・20世紀の過去時制で書かれた小説から成るコーパスで話法を文体論的立場から分析すると、同じ直接話法であっても、DSとFDSの間には数量的にも、質的にも差異がみられる。この2つのカテゴリーを維持することで、より多様化する新時代の小説における話法の変化を客観的にとらえることが可能になる。